

中村裕句集

佐藤文香編

残雪は間もなくもとの春の虹

太白は低くまたたき玉椿

東風吹かばシャワーのしぶき音もろとも

大いなる春のはじめの犬のもの

小槌もて樽の口抜く其角の忌

そよかぜや岸ねになじむ春の水

カーテンの襞横つたふ春の蠅

猫の子のデツキチエアごとみなくなる

波の穂の闇に白さを増す彼岸

港へ下る坂の途中の枝垂桜

散る花に乳首をさがす乳呑児よ

地鎮祭の幕に春風野のにほひ

たがゆゑに水はみじろぐ春の水

春の水からだをめぐり用済に

水音のやめばやんだで朧月

上水も下水も春や大吟醸

海山を春のひかりの汚染水

なほ流る瓦礫まみれの春の水

砂どめの壁をにじむや春の水

冷却プールの波のささゆれささにごり

ビニール袋枝にさはさは昼ぬくし

枝透くや春の北斗は水零す

寄辺なきこの世へ穴を出る地蟲

春宵や石のかけらを文鎮に

岡持長靴干されそのまま春の月

水槽の鮪は病めりビル霞

仮名漢字「」ローマ字かきつばた

砂手本の亀は正字や彼岸西風

梅ぎらひ桜ぎらひや春たけなは

蛍光灯昼なほ灯る花見茶屋

夕よりソメイヨシノの散る東京

にこりともせいでビル建つ桜餅

東京は海の匂ひの暮春かな

死にいそぐ無色無臭は春の風

透明な何かに突きあたりたる春の蟻



ピザ生地を廻せば伸びる其角の忌

病院は十階建ての春の影

入退院とて引越や生き蜆

水も火も人も柱を抱き果つ

放射線撮影はすみ春の陽へ

テープを剥がす作業を開始午前九時

朧夜の黄粉餅にぞ噎せかへる

指栞してながめやる猫の恋

鳥帰る空の空気は空にあり

国境やときに波間のかくれいは

鳥ぐもり朽ちし茅葺屋根は地に

機械だから間違ふことも塵の春

ことだまの幸はふや梅咲きそろふ

春の夢うなつて人を呼ぶ機械

啓蟄や口角上げて自販機へ

うをのめや朝行く月をビルの間

糠漬が横断歩道を渡り切る

頂上と並ぶ屋上いかのぼり

雪解を走る列車の走る影

犬走つたひにをはる猫の恋

マスク内舌打すれば温かりし

綾とりのラーメン構造竣工す

あまつみそらへ戻れよ柳絮日の陰り

燃え尽きし隕石静かなる母音

何の鳥の糞とも知れず春燈

バーコード読み取られたる句集かな

惜春の茶封筒より卵殻

俳人はなくて七草句ふかな

サインポールは止まりにけりな其角の忌

東京の昔は知らず夜の梅

冷め割れの大皿小皿春の風

水鳥の舌の長さよ春の雨

世の春を逃げ去る春の雲と雲

ヴェーナス像を這へばまひまひかたづぶり

バンパールの傷のはじめは春落暉

きさらぎの指紋鏡に着地せり

うぐひすや絶対安静なる呼吸

春風やシアンマゼンタモスグリーン

椰子の葉の怠けるオフィス日和かな

ラーメン店主ガードレールに腰掛ける



花冷の乳首をもつてピリオドに

雲雀失神ひいふうみいよおいつ

画鋏はづれ春の星座図巻上る

パラソルの縁の切込み洩るる息

葉桜やどンドン悲しくなる漫画

残像は群像となり像の象

ボールペンの替芯よ春は春風

発病に到らぬウイルス春のすゑ

離れ技を演じそのまま春の岸

春の夜の警報装置はあきらめない

風の香や厚みを肉と言ふものか

差金の胡蝶はいつか去りにけり

踊る手の禿頭かくすに到らざる

指先のほひなりけり夏の朝

春すぎて縮緬皺の水面かな

蠅が来てしばらく何かして去りぬ

入梅や試着室から顔だけ出す

きよもよと一人隠るる業平忌

外海や柱の角に膝を打つ

すでに乾くゴム手袋の指の数

自来也消ゆ空飛ぶものは離着陸

フィットネスクラブを走る走りぬく

エンジンをかけ人待つや大西日

高架線下のブティック青い薔薇

枕木柵ごとにリヤカー夏の雲

逝つちやふまで暫し我慢の老い盛り

君と君の俳句を責めて枇杷の種

吹きならすあたりは松の落葉かな

アロハシャツこむら返りはふくら脛

命日は鯨忌とかや風つつく

ふなべりで茹玉子わる夏の風

青山河尾は切れ泳ぐ金魚かな

麦秋や句会で留守の馬鹿娘

このまま切らないでください滴れり

階段で別れたきりの合歓の花

駅前はそのまま地下へ波の音

梅雨空へ空調ダクト身をよじる

皿多き独身寮のアマリリス

へそ麺麴をクレオパトラは知らざりき



アンタレスをうかがふ薔薇のあるじかな

朝夕の鳥語を解し青簾

むづかしきことをやさしくかき氷

ながぐつの長短直立横臥かな

蛇いちご土管の中は笑ひあふ

野牡丹の枯尽くしてや西日窓

生残るかたちすなはち樹形なり

ヘリコプター花火はさつき終はつたのに

北半球の素手は素足をもみほぐす

落雷や地中に地底が見つからぬ

手のとどくところ手摺りや辣蕪掘り

人工芝の円陣くづれ夏の風

夕風も朝風も風きのふけふ

手を濡らし棒立ちの友よ夏休

故人と観る近未来映画暗澹

鉄よりもアルミ柔らかか花火の夜

農道をスケートボードや青蜜柑

平行に両の眼並ぶ今朝の秋

二日月小股はちやんとピアノニツシモ

うちももは破線なのかよ流星

秋風や息してゐても年をとる

引退の盲導犬の鼻の砂

銀鼠の波のうねりや土踏まず

はるまきと言へば眼の開く秋の暮

骨相はそのまま蟹の茹であがる

秩父から我孫子へ秋の雲かよふ

燃えない句燃える句奔る夜這星

流水文たどる老眼あきふかし

北京黄昏包子一皿五百瓦

サイレンが近づいてくるがここではない

晩秋は冬のはじめのとろろ昆布

病棟の跡地はジャングルジム一基

消えてつく三階ロフト秋灯

信じるフォーク疑ふナイフ夜半の秋

六日の午後はコンビーフの罐を切る

留守のモスクに宅配便のチャイム鳴る

トワイライトの駅前広場迫上がる

修復中の阿弥陀堂へはバス通り

地に足のつかぬベンチや天の川



鷺は爪狼は牙案山子竹

滑らかな路面に轢死露の秋

ロボットアームが捏ねゆく肉の粘りかな

迂回する陥没道路雁のこゑ

乳母車越す車椅子草の花

全館空調冬のシベリア鳥瞰図

六階のベランダに吹く秋の風

秋の風つかず離れず遠ざかる

秋日和ビニールシートがもぞもぞす

海を越え夜明けは皿を洗ひみる

傷と傷互ひ違ひや秋は冬

粧ふは疲るる山の崩れかな

椋鳥の一羽ガラスに激突す

こがらしや白湯に加へし天日塩

冬三日月まだ見付からぬリツプクリーム

やがて曲がる直線道路冬いてふ

遺言に書きかふる遺書雪だるま

正座くづし風呂敷をとく冬座敷

枯芝の三角形の一辺を

冬の星生まるる前の身じろぎを

始発バス海豚は野菜で炊くといふ

流星は水にも火にも属さない

押花帖植物図鑑と並び冴ゆ

十二月一日ドアのかすり疵

くるぶしの外側左右よりそふや

冬の鳥恋の行方を告げをはる

椅子を持ち歩く女よ大枯木

年の暮神田川沿ひつがひ鳩

納豆の香を口の端に十二月

ダダ・シュールいつそ繭玉飾りませう

駅を見下ろす高層マンション置き炬燵

摩滅せるものごとく冬日差

埋められし海とは知らじ夜の雪

鳥の名の電車六両冬の海

膀胱を天空となす柚子湯かな

年の闇コードに搦むカテーテル

冬眠や大きく吸つて止める息

永遠にはぐれてしまへはぐれ鳩

羊の背にむりやりのつて落ちにけり



寒晴や毛玉そのままバスに乗る

フルトベングラーを干大根と聴く

一音は一打におびえ氷柱垂る

不発弾処理班がゆく枯野かな

自在釣の鯛の鱗や雪しづく

籐椅子に匂ふ旧居や冬日向

見下ろして坂は奈落か寒椿

階段はなにゆゑつづく上らねば

矢印は右グッドモーニング冬

隣接の鎮守の杜の落葉かな

石狩川の石狩平野の日短か

シルエツトなる財務長官くれはやし

名を変へて流るる川よ片時雨

達磨忌や空気枕の空気抜く

瞬けるフェンスの穴よ凍星よ

敷石のぐらつくや冬北斗の柄

ドア開き駅に着きたる空缶は

鉄柵を跨ぐみぎあし冬の象

鍵盤の一打一音年の暮

雪空へ狭き年輪響かせよ

雪原の謎の起伏や日暮れけり

うつすらと騙されてゐる雪の夜

冬耕や柵に電氣を通しけり

僕のための弁当を買ふ冬の朝

絶滅のかの人類として只今

火もガスも電気も温し部屋の蟲

冬の衛星逢ふさ離るさの地下の街

年逝くや壁にベッドを寄せにけり

泣初は全面ガラスすなはち壁

おみくじの全文読了春いづこ

年神様コンナニホンデヨカツタラ

二〇一四年十一月二十二日に発足した悟空の会（中村裕・遠山陽子・佐藤文香）

に、二〇一六年末までに中村裕さんが出句した作品のうち、陽子・文香の選ん

だ作品を中心に編集しました。

二〇二〇年四月 佐藤文香